

片品川流域

情報マップ

砂防工事の安全対策のために過去の土砂災害や地形・地質、気象などの情報提供と土砂災害危険箇所をマップ化したものです。



昭和22年カスリーン台風による沼尾川の被害（群馬県旧赤城村深山）



長野原出張所
〒377-1304 群馬県吾妻郡長野原町
大字長野原1346-8
TEL.0279-82-2138 FAX.0279-82-3490



榛名出張所
〒370-3334 群馬県高崎市
本郷町2246-7
TEL.027-344-0929 FAX.027-344-2434



片品出張所
〒378-0415 群馬県利根郡片品村
大字鎌田3952
TEL.0278-58-2061 FAX.0278-58-4036



浅間山出張所
〒384-2104 長野県佐久市甲1399番地
佐久市役所浅科支所3階
TEL.0267-58-1080 FAX.0267-58-1082



- JR渋川駅より 伊香保温泉行元町バス停で下車 徒歩5分
- 関越自動車道 渋川伊香保インターチェンジより15分

国土交通省 関東地方整備局 利根川水系砂防事務所

〒377-8566 群馬県渋川市渋川121-1
TEL.0279-22-4177(代) FAX.0279-23-4791
<http://www.ktr.mlit.go.jp/tonesui/>

利根川水系砂防事務所

本紙の内容に関する問い合わせは下記までお願いします。

利根川水系砂防事務所 工務課 TEL. 0279-22-4995 片品出張所 TEL. 0278-58-2061

流域のなりたち

■ 片品川流域のなりたち

片品川は群馬・栃木・福島の3県境の黒岩山に源を発し、流域面積673.1km²、幹線流路延長60.8km、平均河床勾配1/37の利根川の左支川です。片品川流域は、群馬県の北東部に位置し、片品川とその支溪や武尊山・赤城山などの

山々が織りなす豊かな自然を有し、尾瀬や奥日光への入口にあたるため、多くの観光客が訪れています。片品川流域の直轄事業区域としては、片品村と沼田市(旧利根村)が含まれています。



■ 片品川流域概要表

水系名	河川名 (第1次支川)	幹川名 (第2次支川)	溪流名 (第3次支川)	流域面積 (km ²)	流路延長 (km)	平均河床勾配	地層	林相	水源	摘要
利根川	片品川	中岐沢		26.31	9.6	1/9.8	8鬼怒川流紋岩類および相当層	シラビソ、オオシラビソ、ブナ、ミズナラ	黒岩山	
				11.15	6.0	1/8.1	1安山岩質降下火山灰及びスコリア、凝灰角礫岩、火砕流堆積物、火砕丘	シラビソ、オオシラビソ、ブナ、ミズナラ	血伏山	
				47.09	12.1	1/10.5	5水無川変成岩類	シラビソ、オオシラビソ、ブナ、ミズナラ	笠ヶ岳	
				15.70	7.0	1/8.1	8安山岩質降下火山灰及びスコリア、凝灰角礫岩、火砕流堆積物、火砕丘	シラビソ、オオシラビソ、ブナ、ミズナラ	富士見峠	
				13.24	9.8	1/7.7	7安山岩溶岩	シラビソ、オオシラビソ、ブナ、ミズナラ、カラマツ	四郎岳	
				19.79	10.4	1/7.7	3流紋岩類	シラビソ、オオシラビソ、カラマツ	錫ヶ岳	
				10.03	6.8	1/5.2	2流紋岩類	シラビソ、オオシラビソ、カラマツ	笠ヶ岳	
				0.00	4.2	1/5.7	7安山岩溶岩	ブナ、ミズナラ	—	
				11.04	8.3	1/6.3	3低位段丘堆積物	ブナ、ミズナラ、カラマツ	三ヶ峰	
				11.02	8.1	1/11.1	6安山岩溶岩	ブナ、ミズナラ、カラマツ	—	
				8.20	6.7	1/6.6	6安山岩溶岩	ブナ、ミズナラ、カラマツ	武尊山	
				12.29	6.1	1/7.7	7安山岩溶岩	ブナ、ミズナラ、カラマツ	—	
				75.72	19.6	1/11.3	3流紋岩類	ブナ、ミズナラ、カラマツ	錫ヶ岳	
				50.65	16.7	1/10.8	8流紋岩類	ブナ、ミズナラ、カラマツ	皇海山	
				21.45	9.3	1/8.8	8安山岩質降下火山灰及びスコリア、凝灰角礫岩、火砕流堆積物、火砕丘	ブナ、ミズナラ、カラマツ	袈裟丸山	
				4.93	5.0	1/7.7	7流紋岩類	ブナ、ミズナラ	—	
				22.80	11.1	1/9.9	9流紋岩類	ブナ、ミズナラ、カラマツ	袈裟丸山	
				3.90	5.2	1/9.9	9火山麓扇状地堆積物	カラマツ	—	
				1.12	2.2	1/5.5	5三浦層群最上部および相当層	ブナ、ミズナラ	—	
				6.91	5.6	1/9.9	5三浦層群最上部および相当層	ブナ、ミズナラ	—	
	3.30	6.1	1/8.8	8火山麓扇状地堆積物	カラマツ	—				
	5.68	6.5	1/7.7	7火山麓扇状地堆積物	カラマツ	—				
	5.32	5.7	1/5.5	5火山麓扇状地堆積物	カラマツ	—				
	5.48	5.0	1/6.6	3岩室層、鳥の巣層群および相当層	ブナ、ミズナラ	—				
			1/7.7	7安山岩溶岩	ブナ、ミズナラ、カラマツ	黒檜山				

※流域面積は管内図及び土砂表より、地層は関東地方土木地質図解説書より、流路延長・平均河床勾配は管内図1/50,000より算出

片品川流域の火山・地形

群馬県の地形

群馬県は、県土の約80%を山地丘陵地が占めており、そこを流下していく利根川本支川に沿って河岸段丘や沖積地が形成され、人々の生活の場となっています。

一方、山地は非火山性山地と火山性山地から成り立っています。非火山性山地は、南西部の関東山地、北西部の三国・帝釈山地、東部の足尾山地などです。火山性山地は、群馬県の地形を特徴付ける重要な要素であり、第四紀に属する比較的新しい赤城、榛名をはじめ、武尊、子持、小野子、草津白根、浅間、鼻曲など多数の火山が、県中央部をほぼ北東から西南に横切って帯状に並んでいます。これらの山地の前山として岩井田、岩野田、丹生、小幡などの丘陵地が分布し、背後には日本海側と太平洋側とを分ける脊梁山脈がそそり立っています。標高にして100~2,500mと大きい比高を示すこれらの山地は、群馬県の自然景観の美しさを構成し、特に成層火山はその景観的な秀麗さをもって、群馬県を代表しています。



日光白根山



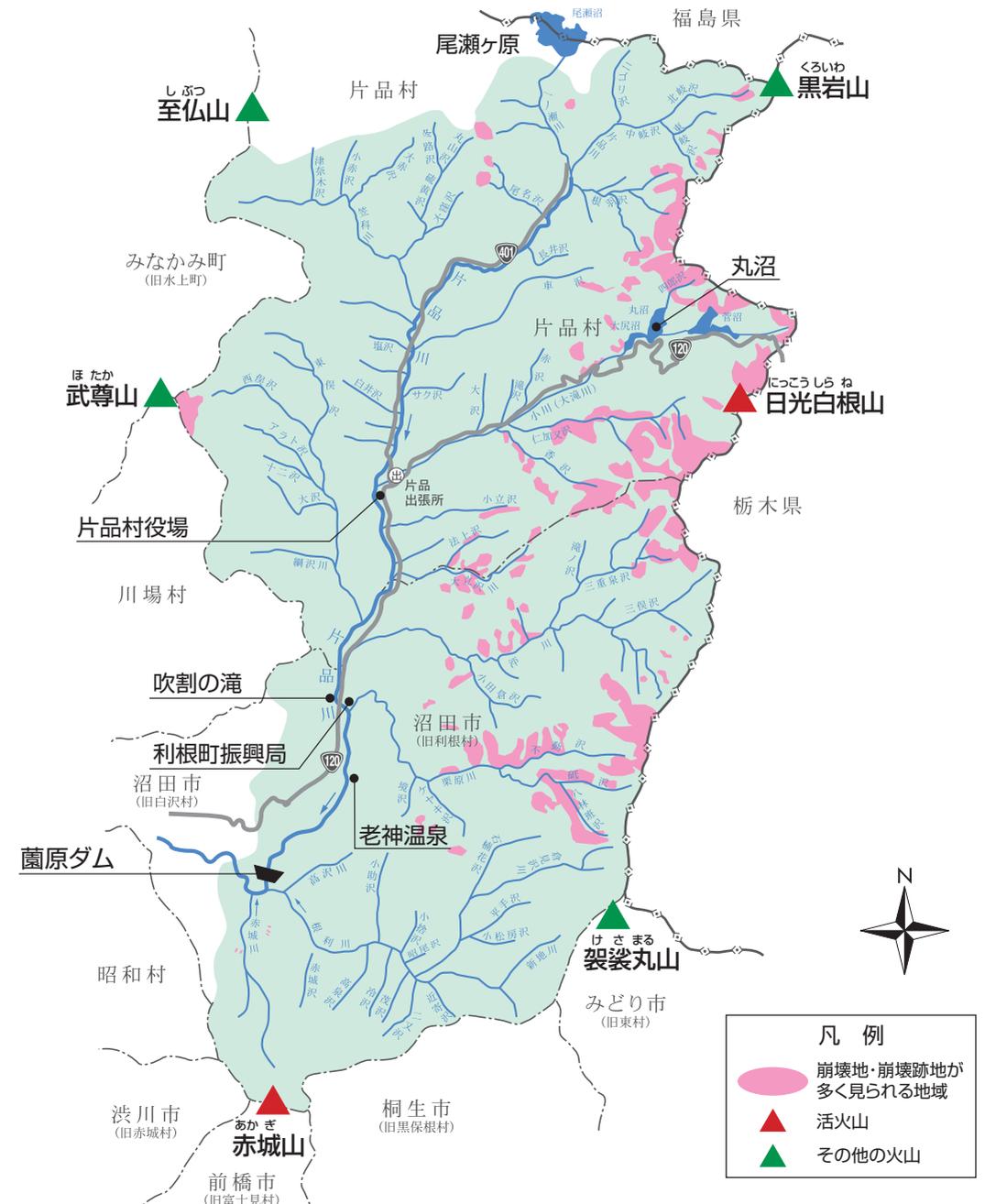
武尊山 (武尊牧場)
[写真：ピジジュアルぐま]



赤城山

片品川流域の地形の特徴

- 上流部……山頂には開析が及んでおらず比較的若い地形。
- 中流部……急峻な壮年期地形で山頂まで開析が進んでいる。
- 下流部……火山斜面を開析した若い地形。



凡例	
	崩壊地・崩壊跡地が多く見られる地域
	活火山
	その他の火山

片品川流域の地質

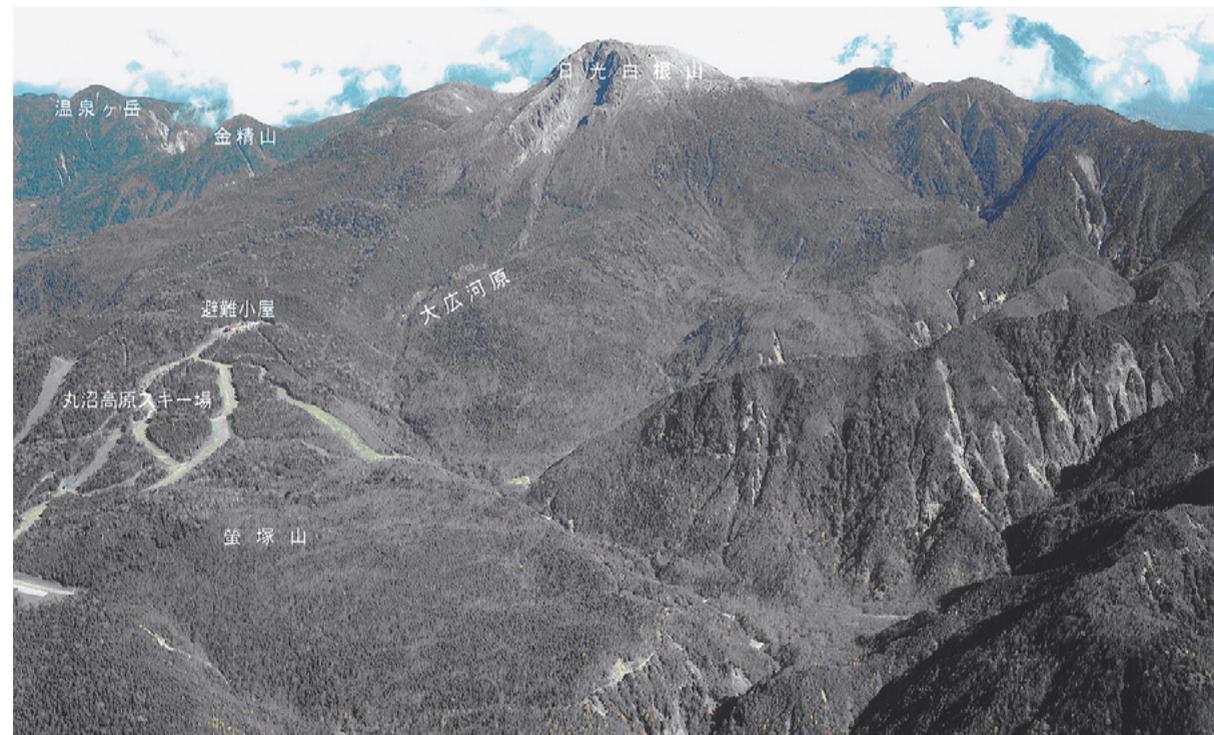
群馬県の地質

利根川流域のなかでも群馬県の地質構造は複雑で、三波川結晶片岩や山中地溝帯など、日本列島の地質構造を代表する岩石や地質構造が分布しています。

南北に走る構造帯は東から足尾帯、片品構造帯、上越変成帯があり、これらを東西に切るように走るのが三波川帯、秩父帯です。群馬県では、これら古生層以降の地質が最も古く、群馬県の背骨を形成しています。こうした背骨の地質は、本州地向斜とその後の本州造山運動の過程で形成されました。

赤城、榛名、子持、小野子や、浅間、草津白根、武尊などの諸火山は、いずれも第四紀に入ってから陸上で噴火を始め、洪積世の末頃にはほとんど完成していたとみられています。各火山の噴出物はそれ以前の地層・岩石を広く覆って、それぞれの火山層を形成しました。

■群馬県の地質



小広河原より白根山 (H15.10.17)

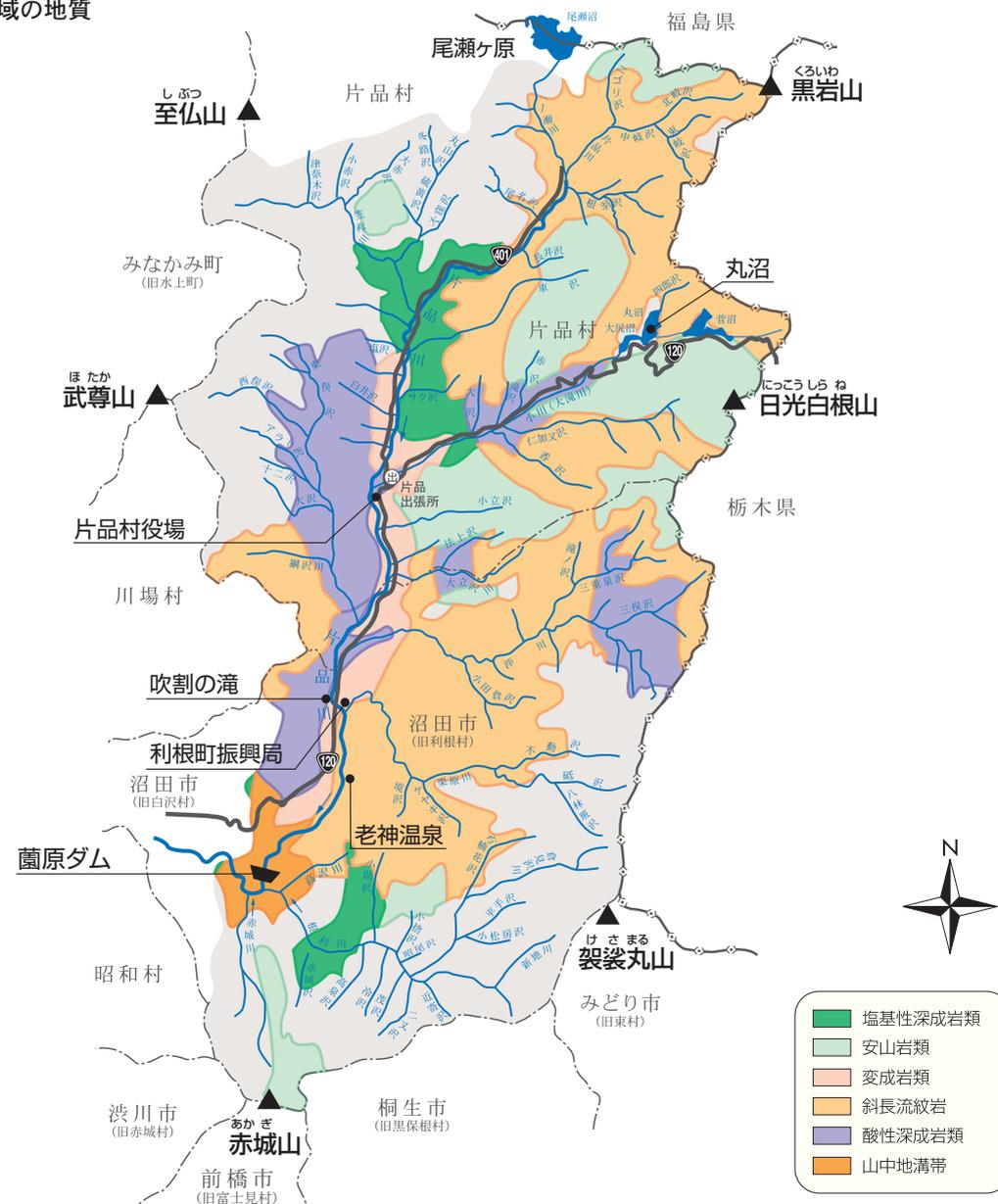
片品川流域の地質

片品川の流域一帯は、中生代末に活動したと考えられる酸性深成岩類及び超塩基性岩類を基盤とし、その上部を第三紀末に噴出した流紋岩が広く分布し、さらにその上部を燧ヶ岳・日光白根山・武尊山等の

火山噴出物で覆われています。流紋岩は局部的に熱水変質が見られ、多くは軟弱岩となっています。また碎屑岩を挟み、このような地域では、規模の大きい崩壊地が見られます。

(出典：群馬の砂防)

■片品川流域の地質

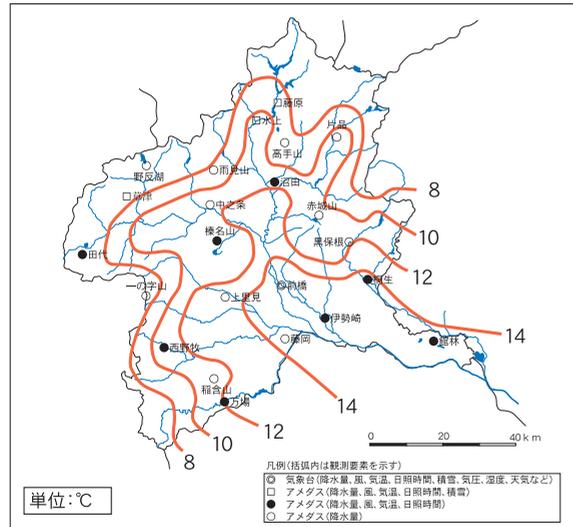


片品川流域の気象

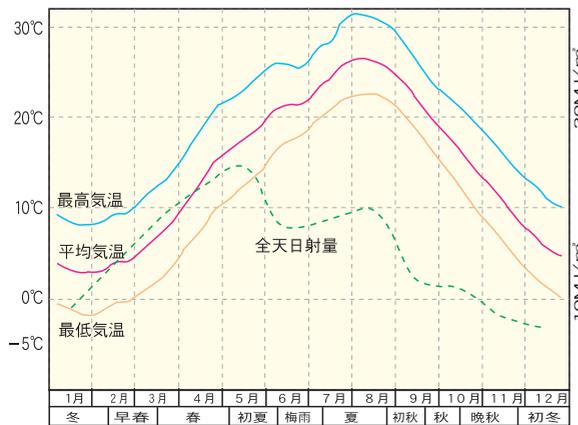
群馬県の気象概況

群馬県は、新潟県、福島県、栃木県、埼玉県、長野県の5県に囲まれた、海を持たない内陸県であり、気候は太平洋沿岸気候となっています。しかし、県内は山と谷と平野部が混在し、北部では標高2,000mを超える山々から、関東平野に連なる平野部では標高10m程度と高低の変化が大きく、山岳気候、平地気候が混在しています。その標高による違いから、厳冬期の北部では氷点下10℃以下まで下降する一方、盛夏期の南東部の平野部では40℃近くまで気温が上昇するなど、地域的な気候の変化が大きくなっています。

■年間平均気温分布図（平年値：1979～2000年）



■前橋の各種気象要素の年変化（年平均）

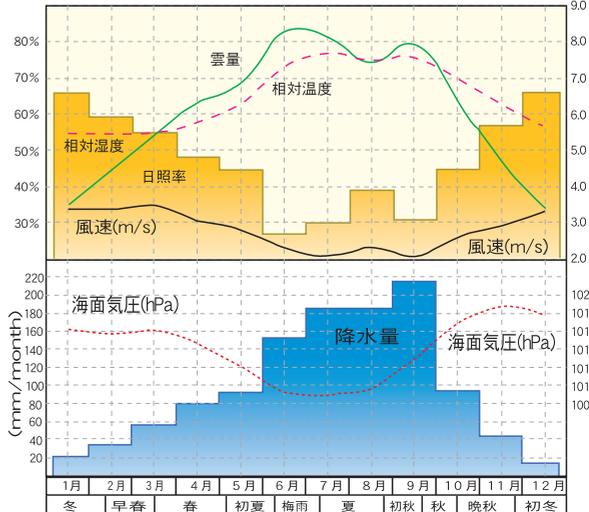
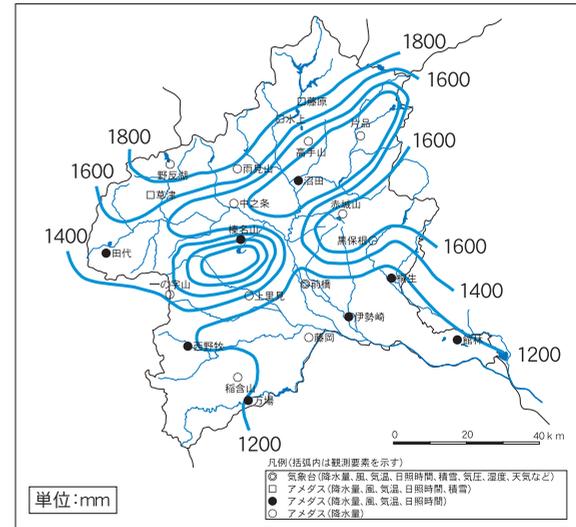


※資料：前橋地方気象台

群馬県の年間平均気温をみてみると、地形に大きく影響され複雑に分布していることが分かります。南東部の平野部では13℃以上あり館林の14.6℃が最も高くなっていますが、西部から北部にかけての山沿いでは10℃以下であり、県西部の高冷地である嬭恋村田代では7.1℃となっています。

群馬県の年間総降水量は南海上から暖湿流の影響を受けやすい榛名山、赤城山で1,600mmから2,000mmと多く、冬期間降雪が多い北部山岳地域で1,800mm以上となっていますが、沼田、片品では比較的少なくなっています。

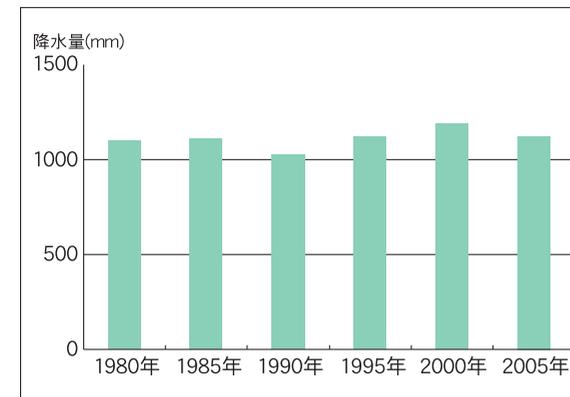
■年間総降水量分布図（平年値：1979～2000年）



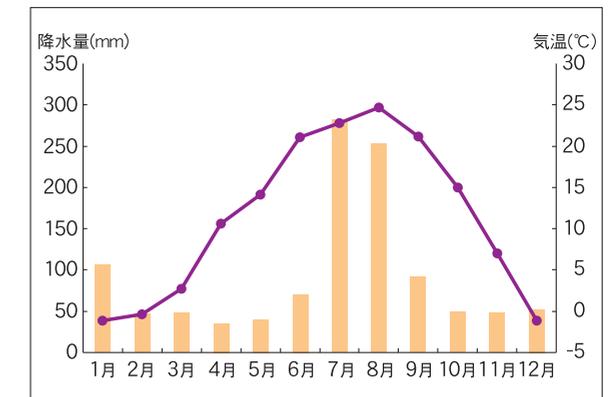
片品川流域の気温と降水量

※気象庁 沼田観測所

■年降水量の推移



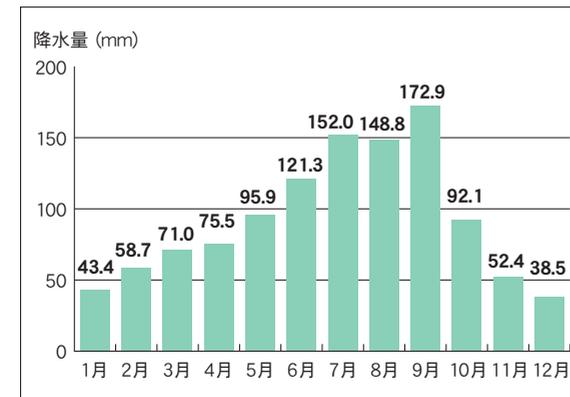
■月別気温・降水量（平成17年）



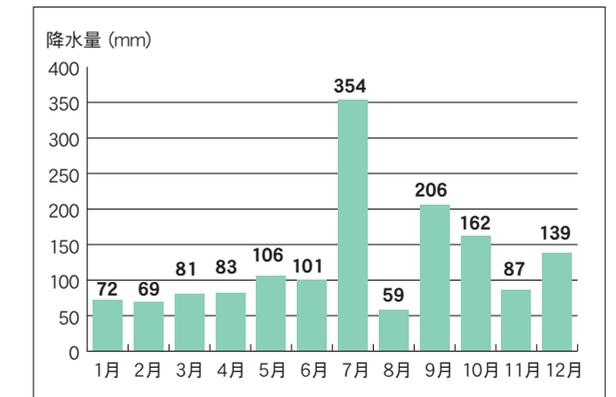
流域内各地点の降水量データ

※資料：気象庁

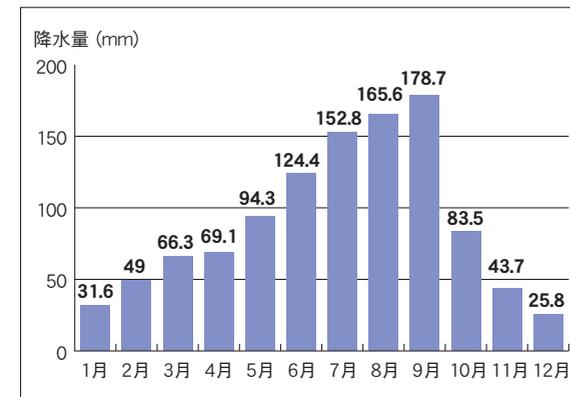
■片品 月別平均降水量（1979～2000年）



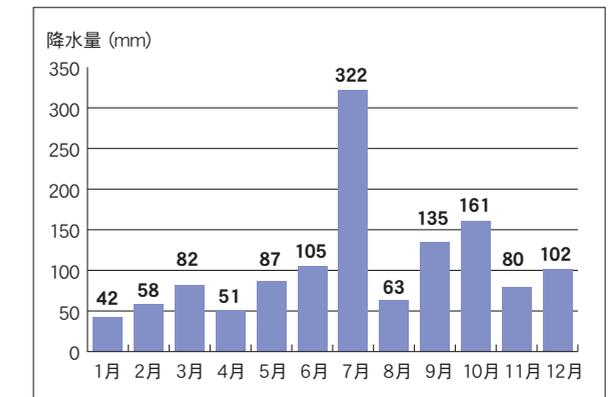
■片品 月別合計降水量（平成17年）



■沼田 月別平均降水量（1979～2000年）



■沼田 月別合計降水量（平成17年）



群馬県の自然災害年表

※ 昭和56年までは「群馬県気象災害史」を、昭和57年以降は群馬県発行の「平成16年度消防防災年報」と災害状況については「上毛新聞」を参照している。
 ※ 風害・水害・風水害・雪害・雷雨害・ひょう害・火山災害・地すべり災害について記している。
 ※ 利根川水系砂防事務所の管轄区域に被害を与えていないものは記載していない。
 ※ 〇に塗られた部分は火山関連の災害を意味する。

和暦	西暦	災害種別(起因)	月日	地域	被害状況
明治43	1910	台風	8月6日～14日	県全域	死者284名、負傷者142名、行方不明者22名、家屋流失倒壊埋没1,476戸、半壊627戸、床上浸水15,579戸、床下浸水11,575戸、道路決壊1,581か所、橋梁流失破損2,039か所、その他農業被害甚大(気象要覧128号) 豪雨のため18万、町歩の耕地を侵し2,400万円の損害(群馬郡誌)
					
					◀ 明治43年の水害 [群馬県立文書館所蔵]
昭和7	1932	草津白根山噴火	10月1日	白根山周辺	13時54分湯釜内壁、外側にて爆発。山頂では降石、灰著しく、10月中活動続く。硫黄採掘の工夫降石により被害。死者2名、負傷者3名。(気象要覧)
昭和10	1935	台風及び副低	9月24日～26日	県全域	死者218名、負傷者190名、行方不明39名、家屋全壊467戸、半壊460戸、流失859戸、床上浸水4,011戸、床下浸水13,320戸、堤防決壊380か所、橋梁流失200か所、道路損壊800か所、田畑流失浸水8,636町、稲作風水害9,050町(気象年報・気象要覧433号)
					
					◀ 昭和10年災害 碓氷郡里見村(現：群馬県高崎市)
昭和12	1937	前線	7月14日～17日	県全域	死者4名、負傷者7名、行方不明者2名、家屋全壊9戸、半壊1戸、流失19戸、床上浸水491戸、床下浸水2,114戸、堤防決壊11か所、橋梁流失52か所、道路損壊58か所、農作物被害7,325町歩119万円(気象年報・気象要覧455号)
昭和13	1938	台風	8月31日～9月1日	県全域	死者32名、負傷者33名、行方不明者2名、家屋全壊238戸、半壊181戸、流失214戸、床上浸水1,667戸、床下浸水6,954戸、橋梁流失277か所、堤防決壊38か所、道路損壊2,518か所、畑流失370町歩、田畑冠水4,200町歩、農作物被害230万円(台風調査報告・気象要覧469号)
昭和22	1947	浅間山噴火	8月14日	浅間山周辺	12時17分砲声音をたて爆発、山頂付近噴石落下し、また西側湯の平で山火事が起きる。登山者11名落石で死亡。(浅間山爆発史集)
		カスリーン台風	9月14日～15日	県全域	紀伊半島南海上より北東進し房総をかずめた台風で降水量多く、既往の大水害である。死者592名、負傷者1,231名、行方不明者107名、家屋全壊1,936戸、半壊1,948戸、床上浸水31,247戸、床下浸水39,808戸、水田流失5,063町、田畑冠水24,403町、畑流失5,255町、堤防決壊341か所、橋梁流失336か所、道路損壊484か所、鉄道被害178件、稲作被害22,300町、減収量23万石(カスリーン台風調査報告)
					
					◀ 深山須田付近の状況(現：群馬県渋川市) [出典：「沼尾川流域災害記録」敷島村役場]
昭和23	1948	アイオン台風	9月15日～16日	県全域	伊豆半島南端をかずめて北東進し房総を縦断して鹿島灘へ抜けた台風。死者6名、負傷者5名、行方不明者4名、家屋全壊8戸、半壊9戸、流失45戸、床上浸水341戸、床下浸水3,616戸、堤防決壊86か所、橋梁流失134か所、道路損壊147か所、田畑流失10,706町(気象要覧589号)
昭和24	1949	キティ台風	8月30日～9月1日	県全域	八丈の西方より北上し前橋の西方を通り、佐渡の東へ抜けた台風。死者44名、負傷者89名、行方不明5名、家屋全壊326戸、半壊1,834戸、流失114戸、床上浸水758戸、床下浸水2,535戸、水田流失494町、水田冠水1,216町、堤防決壊193か所、橋梁流失339か所、道路損壊555か所、鉄道被害50か所、稲作被害19,210町、減収量66万石(気象要覧600号)
昭和34	1959	伊勢湾台風(台風15号)	9月26日～27日	県全域	伊勢湾に大きな被害を出した台風で、県内でも風雨ともに強く、死者10名、負傷者27名、家屋全壊536戸、半壊1,826戸、一部損壊8,226戸、床上浸水847戸、床下浸水5,254戸、農作物被害52,200ha、田畑冠水567ha、堤防決壊4か所、橋梁流失13か所、道路損壊52か所、がけ崩れ33か所、通信施設被害1,894件、被世帯数3,004戸(台風15号速報・気象年報)
					
					◀ 流された旧草軽鉄道の鉄橋(嬬恋村三原地区) [写真提供：宮崎慎治氏]

和暦	西暦	災害種別(起因)	月日	地域	被害状況
昭和41	1966	台風26号	9月25日	県全域	進路の東側で風による風による被害が大きく死者、家屋の倒壊、農作物被害、停電、交通杜絶などがあった。死者15名、負傷者92名、住宅全半壊1,883戸、道路損壊49か所、橋梁流失17か所、農作物被害面積45,729ha、山崩れ68か所など(県警調べ)
昭和49	1974	台風16号	8月31日～9月2日	県内各地	住家流失2戸、床下浸水22戸、耕地流失埋没0.5ha、冠水32ha、道路損壊8か所、橋梁損壊4か所、鉄軌道損壊2か所、通信障害41回線、鉄道一時不通(県警調べ)。農作物被害約6億円(県農政部調べ)
昭和51	1976	草津白根山滞留火山ガス	8月3日	白根山周辺	白根沢(弁天沢)で滞留火山ガスにより登山者3名死亡。
昭和56	1981	台風15号	8月22日～23日	県全域	死者1名、負傷者2名、家屋全壊6戸、半壊6戸、一部損壊132戸、床上浸水176戸、床下浸水2,293戸、罹災世帯192世帯654人、山崩れ437件、被害総額150億円(県災害資料)
昭和57	1982	台風10号	7月31日～8月2日	県全域	台風の本州横断により激しい暴風雨に見舞われ、土砂崩れなどで多くの死傷者を出した。死者5名、行方不明者1名、負傷者52名、家屋全壊56戸、半壊219戸、床上浸水614戸、床下浸水5121戸、農業被害21ha。
昭和58	1983	台風5・6号	8月15日～19日	県北部・西部烏川	負傷者1名、半壊2戸、床上浸水6戸、床下浸水212戸、農業被害2,321ha。長時間の降雨や土砂崩れにより碓氷峠周辺では道路閉鎖が相次いだ。
平成3	1991	地すべり	10月16日	譲原	平成3年10月16日、台風に伴う集中豪雨のため地すべり活動が再発。主要地方道鬼石・中里線(現国道462号)に亀裂が生じた。10月16日～21日まで全面通行止。その後、565日間片側通行の規制が行なわれた。
					
					◀ 地すべりによる国道462号通行止めの状況(現：群馬県藤岡市譲原)
平成10	1998	台風5号	9月16日	県全域	県内を暴風域に巻き込み、各地で猛威を振るった。負傷者1名、家屋全壊1戸、半壊2戸、床上浸水50戸、床下浸水265戸。
平成11	1999	熱帯低気圧豪雨	8月14日	県各地	日本列島を北上する熱帯低気圧の影響で西毛地方を中心として豪雨に見舞われ、道路の通行止めや土砂崩れ、床下浸水などの被害が相次いだ。死者1名、負傷者4名、家屋全壊4戸、半壊7戸、床上浸水49戸、床下浸水560戸。
					
					◀ 豪雨による被害(上野村野栗沢川)
平成13	2001	台風15号	9月9日～11日	県全域	台風の影響で、県内は激しい風雨に見舞われ、各地で被害が相次いだ。上信越自動車道では点検作業中の作業員が土砂崩れに巻き込まれ、2名が死亡し、3名が負傷した。死者3名、行方不明者1名、負傷者3名、床上浸水11戸、床下浸水111戸、農業被害123ha。
				吾妻川	嬬恋村では、万座川に男性が流され行方不明。また、万座温泉へ通じる道路が不通となり、観光客ら780人余りが足止めされた。
平成16	2004	浅間山噴火	9月1日～12月	浅間山周辺	9月1日に21年ぶりに爆発し活動を再開。9月1日の爆発は、大きい爆発音と空振を伴い噴石を飛散。北東6kmまで最大3cmの火山礫が降下し群馬県・福島県の一部で降灰。9月14～18日、小噴火がしばしば発生。群馬県・埼玉県・東京都・神奈川県・千葉県の一部でも降灰。9月23日、爆発。中程度の爆発音と空振が発生。北北東4kmに最大3cmの火山礫が降下し群馬県・新潟県・山形県の一部で降灰。9月29日 爆発。弱い爆発音と空振が発生。北4kmに最大4cmの火山礫が降下し群馬県嬬恋村・長野原町・草津町などの一部で降灰。11月14日、爆発。大きい爆発音と中程度の空振を伴い、山頂の東4kmに直径4～5cm火山礫が降下、長野県、群馬県、栃木県の一部で降灰。
					
					▲ 2004年9月14日の浅間山の小噴火

片品川流域で起きた主な災害

■昭和22年(1947) カスリーン台風

昭和22年(1947年)9月、トラック島付近に発生したカスリーン台風は、紀伊半島の南海上を北上し、9月15日に北緯32度を超えてから北東に進路を変え、同日夜房総半島南端をかすめて16日には三陸沖へ進みました。台風は上陸せず、日本に接近したときは衰弱していたため強風による被害は少なかったです。しかし、日本付近に停滞していた前線が台風刺激され、14日から15日にかけて豪雨をもたらし、関東から東北にかけての諸河川が氾濫して各地で洪水となりました。

関東南部では利根川と荒川の堤防が決壊し、埼玉県東部から東京で多くの家屋が浸水しました。群馬県、栃木県では土石流や河川の氾濫が多発し、両県で1,100名以上の死者・行方不明者が出ました。東北地方では北上川が氾濫して岩手県一関市などで大きな被害が発生しました。

9月9日以来連日の降雨に見舞われていた利根川上流域では、この台風の影響による降雨により大洪水が発生しました。赤城山を中心に5,500か所に及ぶ山地崩壊と、放射状に走るほとんどすべての溪谷で土石流が発生したため、群馬県下の犠牲者は死者592名、行方不明者107名、負傷者1,231名を数えました。

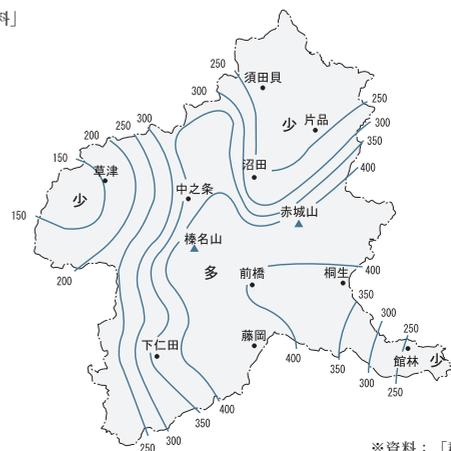
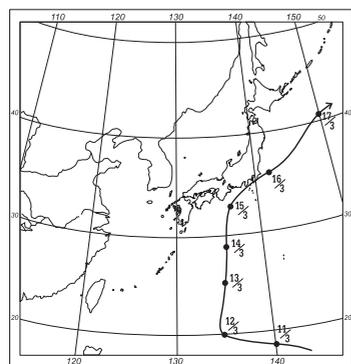
●被害状況

利根川をはじめ、各河川では、至る所で堤防の決壊、崩壊などが発生し、破堤箇所は40か所を超え、冠水面積も2,800km²に達しました。特に利根川は、埼玉県北埼玉郡東村(現大利根町)において、延長400mにわたって決壊し、埼玉県の耕地を荒廃させ、東京都の市街地に浸入しました。これにより、耕地の冠水面積は60,000町歩に達し、千葉県、茨城県への交通連絡は10数日にわたって途絶しました。

利根川上流の山間部では、赤城山での日雨量440mmをはじめとして豪雨に見舞われ、大災害となりました。赤城山系に水源を持つ利根川、沼尾川、天竜川、赤城白川、粕川などは、至る所で土石流が発生しました。また、片品川流域においても赤城川、根利川、平川、栗原川が甚大な被害を受けました。

▶参考文献：「利根川の直轄砂防50年のあゆみ」、「群馬の砂防」、「上毛新聞」、「気象庁資料」

■昭和22年カスリーン台風の進路及び雨量分布



※資料：「群馬県気象災害史」



旧赤城村沼尾橋周辺

■カスリーン台風での被害状況

死者	592名
負傷者	1,231名
行方不明者	107名
家屋全壊	1,936戸
家屋半壊	1,948戸
床上浸水	31,247戸
床下浸水	39,808戸
水田流失	5,063ha
田畑冠水	24,403ha
橋梁流失	336基
鉄道被害	178か所
	(群馬県下)

※資料：「群馬県気象災害史 (カスリーン台風調査報告)より」



旧赤城村佛念付近



旧赤城村深山地区

■カスリーン台風時の最大洪水流量

記録地点		記録日時 (m ³ /s)	最大洪水流量 (m ³ /s)	計画高水流量	備考
利根川	烏川(岩鼻)	15日 18時05分	6,710	3,800	
	渡良瀬川(早川田)	15日 20時45分	3,820	2,800	
	本川(川俣)	15日 22時	14,390	10,000	
荒川	(岩瀨)	16日 5時 15分	7,020	4,170	
那珂川	(千代田橋)	16日 5時	7,000	4,500	推定値
	(青柳)	16日 1時	7,600	5,600	推定値
富士川	(清水端)	15日 16時	4,500	3,200	推定値



大雨による工事現場での被災事例

平成18年12月26日～27日、群馬県沼田市利根町大字根利地先で行われていた「新地川第一・第二床固工事」の現場において、総雨量約80mmの悪天候による河川増水で設計流量以上の水量により土砂が流出仮締切が決壊し、掘削床付面へ土砂、泥水が流入した。この結果、第一・第二床固工ともに水深約4.0mまで溜まった。なお、仮締切の決壊時は夜中であったため、幸い被災者はいなかった。



増水前



増水後



水位減少後

※資料：「群馬県気象災害史」

■平成10年(1998) 台風5号

台風第5号は、9月14日に父島の南海上で発生し、勢力を増しながら北上、16日4時半ごろに静岡県御前崎付近に上陸して、関東地方から東北地方を縦断しました。その結果、群馬県全域は暴風雨となり、各地は猛威にさらされました。

この台風で、箱根(神奈川県箱根町)で393mmの期間降水量を観測、東海から関東地方の山沿いにかけても300から400mmとなりました。また北海道の一部でも、350mmを記録した広尾(北海道広尾町)など300mmを超える大雨が降りました。最大瞬間風速は銚子(千葉県銚子市)では45.7m/sを観測、東海地方から北海道までの太平洋側を中心に30m/sを超えたところがありました。16日には、静岡県石廊崎で8.87mの有義波高を観測しました。

▶参考文献：「気象庁資料」

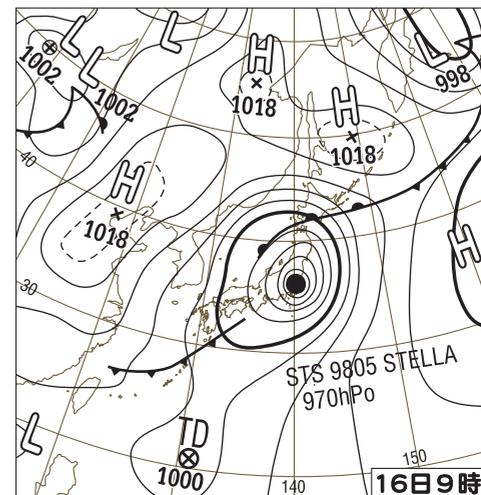
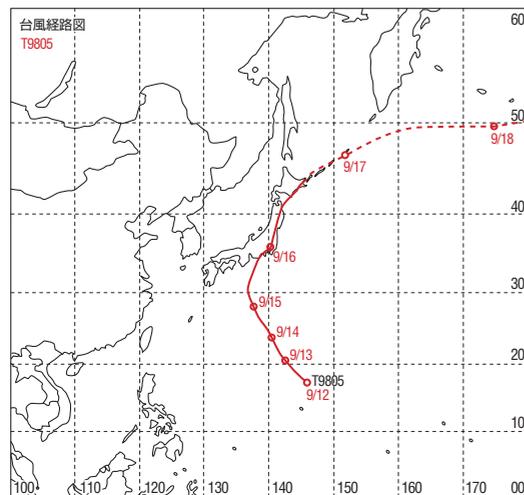


旧利根村の県道橋の流出(現：群馬県沼田市)

■台風5号での被害状況

負傷者	1名
家屋全壊	1戸
家屋半壊	2戸
床上浸水	50戸
床下浸水	265戸
	(群馬県下)

■台風の進路と天気図 資料：気象庁



■平成13年(2001) 台風15号

台風第15号は9月4日に南鳥島の南海上で発生し、威力を強めながら北上を開始し、9日、勢力は弱まったものの本州の南海上で北東に進路を変更し、11日9時半頃には神奈川県鎌倉市付近に上陸しました。その後、次第に弱まりながら台風は、東京都から茨城県北部を通過して海上に抜け、12日15時には千島列島付近で温帯低気圧となりました。

この台風は東海から関東地方の山沿いで大雨をもたらし、奥日光(栃木県日光市)の895mmをはじめ、山沿いでは600mm～800mmの期間降水量となったところがありました。平野部でも静岡市の320mmをはじめ、東京都千代田区の160mmなど200mm前後の大雨となったところが出ました。また、北海道は11日から12日にかけての大雨でオホーツク海側などの一部で200mmの期間降水量を越す地域もありました。

群馬県内では、9月9日から11日にかけての激しい風雨によって各地で被害が相次ぎ、上信越自動車道では点検作業中の作業員2名が土砂崩れに巻き込まれ死亡、3名が負傷しました。さらに、吾妻川流域の嬬恋村では万座川に流された男性が行方不明に、また万座温泉へ通じる道路が不通となり、観光客ら780人余りが足止めされました。

▶参考文献：「気象庁資料」



旧利根村の文化橋(片品川)の落橋(現：群馬県沼田市)

■台風5号での被害状況

死者	3名
行方不明者	1名
負傷者	3名
床上浸水	11戸
床下浸水	111戸
農業被害	123ha
	(群馬県下)

■台風の進路と天気図 資料：気象庁

